日本ウィニコット協会　Newsletter

Vol.12 2023

目次

追悼 島村 三重子 先生.....1
「島村三重子先生を悼む」（館 直彦）.....2
「在りし日の島村三重子先生」（生地 新）.....3
「島村三重子先生から学んだこと」（大島 進吾）.....5
「ウィニコット研究」投稿募集.....10
協会からのお知らせ.....13
編集後記.....15

追悼 島村 三重子 先生

2021 年 3 月 2 日にご逝去されました本協会理事を務めていただいた島村 三重子 先生を偲んで，島村先生とゆかりの深い先生方に追悼文を執筆していただきましたので，ご紹介いたします。島村 三重子先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

追悼 島村 三重子 先生

島村三重子先生を悼む

日本ウィニコット協会会長　館　直彦

ウィニコット協会理事 島村三重子先生はご闘病中のところ，2021 年 3 月 3 日に亡くなられた。ウィニコット協会として，島村先生に哀悼の意を表明したい。

さて，当協会が発足する直前，2019 年 2 月 3 日に仙台でウィニコット・フォーラムを開催したが，そのときに島村先生には大変お世話になった。その際に，先生がウィニコットのことをお好きかどうかもうかがわずに，先生に理事就任もお願いしたのだが，なかなか首を縦には振ってくださらなかった。そこを無理に押し切って就任していただいたが，先生が直ぐにお引き受けくださらなかったのはその時点で既にご自身の健康状態のことを認識しておられたのだと思う。フォーラムのあと，間もなく，先生は一切の社会的活動を退かれたとうかがっている。

私は，島村先生と 1：1 ではお目にかかったことはない。そういうことなので，島村先生のお人柄などについては，先生の身近におられた生地新先生，大島進吾先生の文に譲りたい。島村先生は日本の精神分析に大きな貢献をされた。小寺記念精神分析研究財団は先生のご寄付で成立したし，精神分析的なスタンスのクリニックを開業され，東北地区精神分析セミナーを創始するメンバーの一人であり，宮城野心理臨床センターを開設された。先生は表舞台に立つ方ではなかったが，そこにいることで（being で）精神分析および精神分析的心理療法を生涯支えて来られたように思う。私は，1990 年頃から，精神分析関係の集まりに参加するとよく顔を合わせることがあり，ずっとなんとなく見知っている先生であり，たぶん同世代の先生として親しみを感じていた。私は，4 年に 1 回くらい，東北地区精神分析セミナーに呼んでいただいたが，そのとき主催者の鼎として，セミナー全体を抱えているように見えるのが島村先生であった。

こうやって追悼の辞を書いていると，いかに私たちが得難い人を失ってしまったのか，ということに直面せざるを得ない。謹んで，ご冥福をお祈り申し上げます。

追悼 島村 三重子 先生

在りし日の島村三重子先生

まめの木クリニック　生地　新

島村三重子先生が 2021 年 3 月 2 日に逝去されたというご連絡を宮城野心理診療センターの白井真理先生から受け取ったのは，2021 年 3 月 4 日のことでした。すでに体調のことを少しうかがっていたので，驚きはなかったのですが，とても寂しい気持ちになりました。私を叱ってくれる人が 1 人いなくなったなと思いました。島村先生のご遺志で葬儀は行わず，逝去されたことを伝えるのも限られた人だけにということでした。そういうご遺志もあって，各学会や日本ウニコット協会へのご連絡も控えておりました。

島村三重子先生は，東北大学の医学部を卒業されて，ずっと，精神科医として地道に地域の精神科臨床に携わりながら，精神分析や精神分析的サイコセラピー，集団精神療法を学び続けられていた先生です。東京で開催されていた精神分析セミナーに仙台から通われて，小此木啓吾先生に師事しておられました。島村三重子先生とどこでいつはじめてお会いしたのか，記憶がはっきりしないのですが，精神分析セミナーのパーティの時だったように思います。その後，小此木啓吾先生のご指導の下，1992 年から東北地区精神分析セミナーという名称で，精神分析・精神分析的セイコサラピーに関する系統的な講義を開催することになりました。その際に，島村三重子先生と私など東北地区在住の有志が実行委員会を結成しました。故小此木敬吾先生や牛島定信先生，故岩崎徹也先生が顧問になって下さいました。実行委員長は私ということになりましたが，精神的な支柱になっていたのは，常に島村三重子先生でした。島村先生は，時々，冗談めかして「意地悪なことを言う私がいないとのびのびするでしょう」と言ったりしていました。先生は，東北地区精神分析セミナーの超自我だったのだと思います。私は，時々，島村三重子先生に私の「いいかげん」な活動のしかたを叱られているように感じていました。

1993 年に，島村先生は，ご親戚から遺産相続の形で託された資金を使って小寺記念精神分析研究財団を立ち上げられました。そして，その翌年の 1994 年には，仙台駅近くのビルに宮城野心理臨床センターを開設されました。その後，ご自身のクリニックである愛子メンタルクリニックも開設されました。島村先生は，東北地方，そして日本の精神分析的臨床実践を行う場とその実践のための教育を行う場を作るために，多大な貢献をなさったと思います。そういう意味では，父親的で超自我的なところもありますが，母親的で「育てる人」でもあったと思います。先生の下で，多くの臨床家が育っていると思います。

以上の文章では，島村三重子先生のご活躍やご貢献を十分には説明しきれていないと思います。先生は，目立つことと形式的なことはお好きではなかったのかもしれません。そのために，もしかしたら，先生のご貢献をあまり知らない会員もいらっしゃるかもしれません。そして，島村先生は，自分のポリシーを守って，ひっそりといつのまにかいなくなるという

方法で私たちの前から姿を消したのだと思います。

島村先生と本協会との関係についても触れたいと思います。仙台でウィニコットフォーラムを開催したのは，2019 年 2 月 3 日のことでした。私も協力しましたが，主に島村先生がマネージメントを引き受けてくださいました。先生が確保した仙健ビルの会場は，ほぼ満席になり，盛会でした。この会が，日本ウィニコット協会が結成される直前のフォーラムでした。先生は，日本ウィニコット協会の結成に賛同されて，理事に就任して下さいました。ただ，私が考えるところでは，その年の初夏の頃に，島村先生は，身体の異変に気づかれたのではないかと思います。これも記憶があいまいなのですが，2019 年の初夏の頃に，島村先生と宮城野心理臨床センターでお会いしたときに，突然，先生は「精神分析の勉強は飽きたわ。東北地区精神分析セミナーも，そろそろ店じまいを考えているの」と言われました。先生は，体調のことには，全く触れなかったし，その時はお元気そうに見えたので，私は面食らいました。先生は，ご自分の身体の異変やその性質についてはすでにわかっていたのだと思います。そういう事情を知らない私は，「もう 4 年間はやりませんか？」とお返事しました。その後，2019 年 7 月 20 日に，メールで「病気が見つかり近々その治療に入る事になりました。年齢から考えて，色々なことから引退しようと思っています。東北地区精神分析セミナーの事務局に関しては，整理をして白井さんに引き継ぎます」というご連絡を受けました。セミナーは取りあえず店じまいしないことになりました。島村先生にお会いしたのは，2019 年 7 月 13 日に仙台で行った東北地区精神分析セミナーの事例検討会が最後でした。その時期に，先生は，臨床の仕事も本当に引退なさり，治療と療養に専念されました。しかし，残念なことに，2021 年 3 月 2 日永眠されました。島村先生，長い間，ありがとうございました。私たちは，先生と同じようにはできませんが，もう少し頑張ってみます。ご冥福をお祈り申し上げます。

追悼 島村 三重子 先生

島村三重子先生から学んだこと

東北福祉大学せんだんホスピタル／宮城野心理臨床センター　大島　進吾

「怠け者の私は小此木先生に尻を叩かれながら学会発表をし，拙い論文を出し資格を取りました。論文作成過程での小此木先生とのやり取りはとても私にとっては良い体験でした。初めて精神分析的にクライエントを理解することがどういうことなのか，身体感覚で分かってきたキッカケでした。2 回目の更新の手続きをした時，申請に必要な精神分析の活動をしてないし，内容がない，詐欺みたいと感じました。肩書きなんて意味がないという考えですから，役に立つ立たないは別として実情に合わない肩書きはいらないと思い 3 回目は更新しませんでした。ただ精神科医と心理士は立場が違うし，あと 50 回ほどの SV でクリヤ出来るなら，一度はとって下さい。そういう力がある人という周りの評価を一度取っておいて，意味がないと思えば次に更新しなければいいのだと思います。私は高校生の時に大学なんて行く意味はない，すぐ社会に出て働くと駄々をこね，その時に姉が入ってから辞めればいいでしょと言いました。3 年生の秋に急に精神科に興味を持って，医学部受験を決めました。私は気持ちの中に何かが湧き起こらないと行動できない人間です。でも，内容のある肩書きならば私は大賛成です。大島さんの立場だったらきっと役に立つと思います。老人の繰り言です。」

コロナ禍で人と人とが隔てられる生活を余儀なくされる中，精神科医の島村三重子先生は 72 歳の生涯を閉じられました。数年にわたる厳しい闘病生活を経ての 2021 年 3 月 3 日のことでした。上記の文章は，ちょうど亡くなる 1 ヵ月前に先生からいただいたメールの一部の内容です。当時の先生の病状や体調を考えると，メールで文章を書くだけでもとても大変なことだったのではないかと想像しますが，ただただ感謝の念に堪えません。

私は，若い頃は精神分析家になることを夢見たこともありましたが，すぐに物理的にも能力的にも，自分にはとても無理だと悟りました。精神分析学会の認定資格についても，賛否様々な考え方が学会内にあることを知るにつれ，自分でも考えれば考えるほど取得する意義を見いだせなくなっていきました。そんな中，何かの会話で「学会の認定資格ももう別にいいっすかね」と口走った私に対して，改めて送ってきてくださったメールが上記の内容でした。これが島村先生との最後のやり取りになりましたが，島村先生の人となりが少し表れているように感じたので紹介させていただきました。

私が先生と初めて出会ったのは，2006 年 3 月のまだ肌寒い時期でした。当時の私は大学院の修士課程に在籍していましたが，そのまま博士課程に進学することになっていました。ただし，研究室の指導教員だった吉村聡先生（現上智大学）が別の大学の方に移られることも既に決まっていました。そのため今後の研究をどう進めていくかということと同時に，心

理療法をどのようにして学んでいくかについても真剣に考えていく必要がありました。そんな時に吉村先生が，東北から去る前に指導をお願いして下さったのが島村先生でした。

吉村先生に連れられて，同じ研究室で唯一の同期だった荒谷美子さん（現静岡医療センター）と一緒に，島村先生が 1999 年 8 月に開院された愛子メンタルクリニックを尋ねました。クリニックは仙台市の中心部からやや離れた住宅街に位置していました。建物自体もまだ新しくてデザインや装飾品などどれも素敵で，こんなところで仕事ができたら，と思えるようなクリニックでした。その中でも建物を囲む広大な庭がとても美しく，きれいに手入れされた緑の芝生が特に印象的でした。白衣姿の島村先生は想像していたよりも小柄でしたが，迫力と気品，そして，おとぎ話にでも出てきそうな独特な雰囲気がありました。

それから，予定通り月 2 回の個人スーパービジョンが開始となりました。私と患者との間で起きていることについての先生のコメントはいつも鋭く，驚かされることや助けられることが何度もありました。しかし，精神分析に対して教条的な傾向が強かった私に比べると，先生は柔軟で徹底的に現場中心・患者中心の方でした。よくいたずらっぽく笑いながら，「大島さんはやっぱり頭でっかちね・・感じることが大切なのよ」「またなんか難しい本でも読んだんじゃない」「大学院で何を勉強してきたの？荒谷さんはもっとちゃんとやってるわよ」などと指摘されたことを昨日のことのように思い出します。

先生は，患者のパーソナリティの成熟度に合わせて，転移解釈以外の支持的な介入や環境調整が必要な場合が多いこと，そして，患者との関係性についてある程度把握できている中での判断であれば，それが治療を促進するとよくおっしゃっていました。常に現場を中心に考え，患者のことを置き去りにしないこと。この当たり前に重要なことでありながら，ともすれば抜け落ちてしまいやすい点について，島村先生は繰り返し気づかせてくださいました。

さらに，「心理職は必要な情報を聞かなすぎる」「心理職はアセスメント，特に病理の見立てが弱い」と常々おっしゃっていたことも印象に残っています。私もそれらの点について何度も指摘され，「こういうタイミングで口をはさむものなのか」「生育歴や家族歴ってこんな感じで聞けばいいんだ」「先生は診断のためにこういうところに注目するのか」などと目から鱗なことばかりでした。そして，そのたびに島村先生は診察でも口のはさみ方や質問がとても上手なのだろうなあと感じたものでした。実際に，先生と長く一緒に働いてこられた方に話を伺うと，患者に対してだけでなく，行きつけの飲食店のご主人やスタッフに対しても懐にスッと入り込み，様々なプライベート情報をいつの間にか把握されていたそうです。

島村先生は愛子メンタルクリニックを 2014 年の 3 月に閉院されました。当初から 15 年くらい続けるイメージで開業され，2 年ほどじっくり時間をかけて準備を進め，予定通りのタイミングで閉院されました。それからは，あおばの杜診療所というクリニックで週 1 回パートタイムの勤務医として診療にあたりつつ，先生が 1994 年に開設された宮城野心理臨床センターという自費の心理療法機関で心理療法の実践やスーパービジョンの時間を引き続き持たれていました。そして，ちょうどクリニック閉院のタイミングで，約 8 年間に及ぶ私のスーパービジョンも終わりを迎えました。

その後しばらくして，私は宮城野心理臨床センターで働かせてもらうことになりました。必然的に，スーパービジョンを受けていたときに比べると，島村先生と様々な話をする機会や先生について見聞きすることが増えていきました。それまでは，島村先生が小寺記念精神分析研究財団の創設に関わっていたことについても，東北の地において精神分析的な実践の普及や精神分析的な理解を大切にする実務家の育成に長い年月をかけてかなりのエネルギーを割いてこられたことについても，うっすらとしか私は知りませんでした。だから，先生のことを知れば知るほど，想像していたよりもこんなに凄い人だったのかという思いを強めていきました。しかし同時に，そんな先生だからこそだと思うのですが，東北の精神医療や心理臨床の現状や水準に対してはかなりの危機感を持たれていました。そのため，自分が求める水準に達していないと判断した心理職や精神科医に対しては，容赦なく厳しいまなざしを向けられることもありました。

このように臨床や人材育成に対して強い情熱と厳しさを持った先生でしたが，裏表がなく真っすぐにコメントしてくださる方でもあったので，先生の言葉で救われることや温かい気持ちになることも幾度となくありました。私に限らず，そのような方は本当にたくさんいらしたように思います。たとえば，私が博士課程を中退することを決めた際には，多くの人に「もったいない」「せっかくなのになんで」と言われましたが，先生は「臨床をちゃんとしてから研究する方がある意味まともだと思うのよね」と笑いながら言ってくださいました。また，組織で働いていくうえで人見知りの性格であることがいかにディスアドバンテージとなるかを私が嘆いていたら，「私だってこう見えて人見知りよ・・無理に人と仲良くしようとする方が頭がおかしいわよ」という言葉が返ってきていささか驚きました。島村先生はこのように，人が安心する言葉やエンパワーする言葉を自然に人に与えることができる方でした。

ある時に，先生が「みんな東北から出て行っちゃうのよね・・・でも，私は意地でもここに残ろうと決めているのよ」とおっしゃったことがありました。関東出身の島村先生が東北に居続けた理由は様々にあったのだとは思うのですが，私は東北を見捨てられないというところも大きかったのではないかと考えています。先生のことを頼りにする方は，患者さんやご家族はもちろんのこと，心理職や地域の保健師，学校の先生，福祉施設のスタッフなど，本当にたくさんいらっしゃいました。愛子メンタルクリニックの閉院というミッションを計画通りに終えた先生は，「なるべく仕事をしたくない」「早く引退したい」と言っておられました。それで，当初はあおばの杜の診療所での勤務も祝日休みの多い月曜日を選択し，宮城野心理臨床センターや他の仕事も最小限にセーブしていく予定だったようです。

しかし，死に至る原因となった病が見つかるまで，クリニックでの週 1 の診療ではパンク寸前の患者数を診察し，宮城野心理臨床センターでも患者や家族に頼られれば面接を行い，心理職などの支援者から助けを求められれば，手を差し伸べられていました。病が見つかってからも，メールや手紙で患者と家族，支援者たちの相談に随分乗っておられました。患者の受け入れ先や紹介先の相談を私も何度も受けました。そういえば，スーパービジョンを引き受けていただいた時は 19 時開始の予定になっていましたが，19 時になっても始め

られないことがしばしばありました。当時は，「精神分析の先生だけど，緩いところもあるんだな」「そのあたりだけは真似しないようにしよう」と思っていました。無論，時間通りに開始しないことは問題ですし，その後のことも踏まえると実際に緩めの部分もなくはなかったですが，大体は患者さんとの診察や地域の支援者との会議などが長引いてのことでした。

「心理職の人たちにはもっと自立して欲しいと思ってきたけど，どこかで自分が手をかけすぎて自立を邪魔してきたところもあったのかな，自分がそういう雰囲気を出していたところがあったのかも」と先生が反省されていることがありました。確かに，一定の関わりがある関係の中で，助けを求められたり，頼られたりすると，先生は無下にはしない，放ってはおけない方でした。それに，島村先生ほど味方になってくれると心強い存在はいなかったようにも感じます。そのため，先生のことを頼りにされる方や先生に助けを求められる方がたくさんいたことは自然なことだったと思いますし，だからこそ，「早く引退したい」と思いながらも，思い描いたように引退することが難しかったのではないかと想像します。

自分にはとても先生のような仕事の仕方はできそうにないですし，先生にしか分からない孤独や苦悩もあったように思います。ただし，最後のメールにも書かれていたように，心に何かが沸き起こると，行動に移せるところ，特に，自分のことを頼りにしてくる人や困っている人のために，迷わず行動できるところは，率直に凄いと常々思っていましたし，自分ももう少しそうあれるようにいたいと心から感じています。

最後に，2024 年 2 月 24 日に島村先生が生地新先生や水俣健一先生たちと長年にわたり運営されてきた東北地区精神分析セミナー主催で，「島村三重子先生追悼ワークショップ」という企画を仙台で行う予定です。自分が前に出ることや目立つことを常々嫌がっていた先生ですが，もしかしたら自分の名前が前面に出ているこの企画に対してはあちらの世界で怒っていらっしゃるかもしれません。しかし，内容は島村先生がこれまで東北の地において大きな役割を担い，労力を割いてこられた「地方」の精神分析的な実践と研修のあり方についてみんなで一度改めて考えていこう，というものになっています。島村先生という大きすぎる存在を失った私たちがこれから前を向いて進んでいくために必要な取り組みだと考えているので，これまでと同じように温かく見守って下さると嬉しいと思います。また，先生の干支はねずみ年だったようですが，生まれ変わったら猫になりたいと常々おっしゃっていたと聞きました。猫に生まれ変われるかどうかは私には分かりませんが，本当に安らかにお過ごしいただけることを，心より願っています。

先生と出会った時には，こんな追悼文を書く日が来るとは夢にも思いませんでしたが，本当に今までありがとうございました。島村先生が亡くなられて 2 年以上経ちましたが，この文章を書くことを通して，本当の意味で先生とようやくお別れができたように感じます。心の底から強く感謝しています。

＜謝辞＞

まず，このような貴重な機会をくださった，日本ウィニコット協会理事会の先生方に感謝

いたします。そして，島村先生と長く一緒に仕事をされてきて，貴重なエピソードを幾つか紹介してくれた，宮城野心理臨床センターの白井真理さんと齋藤（高島）香織さんにも感謝いたします。

「ウィニコット研究」投稿募集

「ウィニコット研究」投稿募集

当会では，日本ウィニコット協会雑誌「ウィニコット研究」を発刊いたします。投稿論文の募集も開始いたしますので，下記の投稿規定をご参照ください。なお，投稿規定は協会 HP にも掲載しております。会員の先生方からの積極的な投稿をお待ちしております。

日本ウィニコット協会「ウィニコット研究」投稿規定

1. 投稿資格
投稿は原則として，日本ウィニコット協会正会員，顧問に限る。

2. 投稿条件
論文内容は未刊行のものに限る。

3. 採否
論文の採否，掲載順などは編集委員会が決定する。

4. カテゴリー
投稿する論文のカテゴリーは以下の通りである。

論考：ウィニコットや独立学派精神分析の実践や芸術，その関連領域における，理論，概念，歴史や文化的背景などについての著者独自の見解を提起する論考。12,000 字以内を目安とする。
総説：特定の主題についての学問的動向を遠望し，筆者独自の論考を示した論文。12,000 から 28,000 字以内を目安とする。
原著：個人・集団の心理療法や心理検査による臨床研究，観察研究，質的研究，実証研究，また文化や芸術領域等における論考であり，独立学派精神分析とその関連領域についての著者独自の主張が提起されている論考。12,000 字以内を目安とする。

著者は投稿の際，掲載を希望するカテゴリーを表題の前に明記すること。

5. 図表
図表，写真などは図 1・表 1 と順序を付け，それぞれに和文で題をつける。文字数の制限に図表は含まない。

6. 原稿の作成
原稿はワードプロセッサを用いて作成する。A4 用紙に横書き，40 字×40 行を目安に原稿を作成すること。

7. 外国語の表記
人名，地名等の固有名詞は原則として原語を用いる。
（例：Winnicott, D, W / Freud, S / London）

8. 引用

文献の主著者のアルファベット順に番号を付し，本文中にその番号を適当な個所に付す。肩付きで（1）（2）のように記載する。本文の末尾に「文献」という表題にて文献リストを付し，文献を番号順に記載する。各文献は，雑誌に掲載された文献については，著者名，発行年，題名，誌名，巻，ページの順，単行本の場合は，著者名，発行年，書名，出版社名，発行地の順に掲載する。

（例）

（１）妙木浩之（2021）：Laplanche の「謎のメッセージ」．精神分析研究 65（4），369–375

（２）Bollas, C.（1979）：The Transformational Object. International Journal of Psychoanalysis 60, 97-107

（３）Patrick Mahony.（1987）：Freud as a Writer. Yale University Press. 北山修監訳（1996)：フロイトの書き方．誠信書房，東京

（４）Winnicott, D. W.（1968）：The use of an object and relating through cross identification. In Winnicott, D. W.（1971）：Playing and Reality. Basic Books, New York. 橋本雅雄訳(1979)：遊ぶことと現実．岩崎学術出版社，東京

9. 表題等

表題，著者名，著者所属，5 語以内のキーワードをつける。

10. 要約

原著については，本文はじめに 800 字程度の邦文要旨を付す。

11. プライバシー

クライエントのプライバシーに十分配慮せねばならない。臨床研究においては，その情報は修飾することとし，経過の詳細等よりも主張の独自性を重視する。

12. 投稿の方法

投稿の際は，論文の電子データを（原則として Microsoft の Word 形式）を電子メールの添付ファイルとして，日本ウィニコット協会事務局（jwasecretariat@gmail.com）宛てに送信する。

協会からのお知らせ

研修会・協会共催事業のご案内について

日本ウィニコット協会では，ウィニコットおよび独立学派に関する研修会や，協会共催事業を会員の皆さま宛てにご案内させていただいています。

つきましては，会員の先生方が主催されている研修会などで，会員の皆さまにご案内したい内容がございましたら，協会事務局宛てにメール【jwasecretariat@gmail.com】にてご連絡ください。理事会にて審議の上，承認された場合，協会ホームページの「研修会情報」への掲載と，メーリングリストでの配信をさせていただきます。

なお，メールの件名を「研修会（協会共催事業）掲載希望」とし，本文に研修会の詳細をご記入ください。フライヤーの画像データや PDF などがあれば，そちらも添付していただければ掲載いたします。

協会からのお知らせ

2023 年度分年会費納入のお願い

2023 年度（2023 年 4 月～2024 年 3 月）の日本ウィニコット協会の年会費の納入についてご案内いたします。納入会費は下記のとおりですので，まだお振込みでない方は，下記口座にお振込をお願いいたします。

記

〇年会費：5,000 円

〇納入方法：銀行振込（送金手数料は自己負担でお願いします）

振込先：りそな銀行上六支店
口座番号 ： 普通口座　0370321
口座名義 ： 日本ウィニコット協会

＊必ずお名前をご明記ください。
＊職場名義での振込み等される方は，ご一報くださるようお願いいたします。

ご不明な点がございましたら，協会事務局までご連絡ください。

編集後記

島村先生への追悼文を拝読し、身の引き締まる思いがいたしました。「巨人の肩に立つ」という言葉がありますが、私のようなしがない心理士は、肩に立つこともままならず、未だに巨人の肩によじ登ろうとしているような状態です。私には肩に至る道ですら険しく長いもののように思えます。島村先生や先達の先生方がそれだけのものを積み上げてきてくださったからなのでしょう。いつか巨人の肩に立つことを目指して、転んだり、時々落っこちたりしながら、なんとか登っていこうとすることしか私にはできません。

改めまして、島村三重子先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（奥田 久紗子）

2023 年 11 月 25 日発行
日本ウィニコット協会　Newsletter vol.12

編集：石田　拓也
　　奥田 久紗子
発行：日本ウィニコット協会

日本ウィニコット協会事務局
e-mail：jwasecretariat@gmail.com
HP：https://winnicottforum.com

〒543-0001
大阪府大阪市天王寺区上本町 6 丁目 6-26 上六光陽ビル 601
たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内